

Ⅱ 開発の実際とその成果

1 開発の実際【研修編】

「伝統・文化」体感型ワークショップ【研修編①】

「和太鼓」から広がる音楽学習（受講者 107 名）

講 師： 吉田 拓也／野口 操
実施日： 平成 22 年 7 月 27 日(火)

- =====
- 目的：
 - ・ 伝統や文化を尊重する意義を知る。
 - ・ 和太鼓を打つ姿勢、基本奏法を学び、初歩的な楽曲を演奏できるようにする。
 - ・ 現場の授業をシミュレートし、授業における和太鼓の活用法を学ぶ。

 - 期待される効果：
 - ・ 和太鼓の基本奏法を身に付け、学校における伝統音楽の指導の工夫改善を図る契機となる。
 - ・ 和太鼓の表現力の豊かさを体験し、教員が和楽器や伝統・文化のよさを感じ取るとともに学校や児童の実態に応じた授業展開を計画・実施できる力を身に付ける。

 - 準備教材・設備等：
 - 和太鼓、バチ、動きやすい服装

 - 研修の流れ（@3 時間×1 日）
 - 準備体操
 - ↓
 - 立ち方、バチの握り方を説明
 - ↓
 - 和太鼓 1 台につき 3、4 名ずつにわかれて、太鼓の打ち方を解説
 - ↓
 - 「こきりこ」のリズムの実演
 - ↓
 - 場所の移動、構成を決め、交代で 1 人打ちの演習
 - ↓
 - 2 人打ちの演習
 - ↓
 - 4 人打ちの構成を解説、演習
 - ↓
 - 全体で 4 人打ちの合奏

 - Advice points
 - ・ 和太鼓 1 台に対して 4 人打ちの構成が可能である。
 - ・ 声に出してリズムを取ること、口唱歌が大切である。
 - ・ 和太鼓は打つ、振りを入れて動くなど、体力を使う為、適宜休憩を取り入れる。

■講師の感想（要約）

親しみやすい民謡「こきりこ」を教材に、和太鼓の響きや音色のよさを感じ取りながら、全身で奏でる和太鼓の特性を体感できる内容とした。指導内容が多かったが、グループ演奏を通して、受講者のコミュニケーションが図れ、集中力をもって、皆でやりきろうという空気が出てきたことは大変効果的であった。和太鼓を音楽科の教材に使用したいという希望が多いことに励まされ、今後は授業カリキュラムの中に和太鼓の題材を位置付け、教材を含め、より効果的な指導方法を考えて行きたい。実際の指導においては、楽器（和太鼓）の数が少なくても、演奏形態の工夫により授業として成立することも知ってもらえたと考える。

■受講者の感想（抜粋・要約）

- ・技術の習得だけでなく、子どもたちの表現力、集中力、発信力、コミュニケーション能力、達成感など、いろいろな力を付けることにつながるということを実感した。
- ・和太鼓は比較的簡単な楽器だが、みんなと気持ちを合わせないと一つの音にならない。コミュニケーション力の不足する子どもたちにとって、身体表現をしつつコミュニケーション力を養うのによい教材だ。
- ・和太鼓のグループ演奏は、互いに聴き合い、目と目で通じ合うアイコンタクトが自然に体験でき、2人打ちや4人打ちの隊形移動もあり、コミュニケーション能力が養える。
- ・和太鼓の音は心に響くものだと実感した。心の高まりを子どもたちにも体験させたいと思った。演奏の最後、「ヤー」の掛け声の後の静寂に感動した。
- ・日本古来の楽器（和楽器）に親しむ機会として和太鼓と一緒に打つことで、一体感が生まれる。
- ・最初は自分にできるか不安でも、だんだんと演奏できて行く喜び、そして集中力、コミュニケーションの大切さ、演奏後の達成感などを子どもたちに体験させたい。
- ・音楽の授業にどう生かして行くかをさらに考えて行きたい。
- ・真の国際人になるには自国の伝統・文化を理解し、伝えられなければいけないと痛感した。

